
書 評・紹 介

石 南國著

『人口論 ——歴史・理論・統計・政策——』

創成社, 1993年 5 月, 270頁

わが国の人口研究の流れをみれば、南亮三郎（1896～1985）を中心とするマルサス人口論を基礎に人口経済学を発展させてきた南人口学の系譜に連なる一群の研究と、館稔（1906～1972）を中心とする形式人口学を基礎としてそれを発展・継承してきた研究の流れが存在するであろう。

本書は、南人口学を継承する研究者の一人である石南國教授が、長年の研究実績をもとに、南人口学を継承し、自らの実証研究をもとに独自の人口論としてそれを示すことを企図し、まとめられたものである。

本書の構成と内容についてみると、第1～3章が南人口学を石教授の視点からまとめられたものである。第1章では、「人口問題の歴史性」と題し、人口増加と人口問題について簡潔に分かりやすく解説されている。第2章では、「人口学における歴史・理論・政策」と題し、人口研究の視座を明らかにし、マルサス人口論を基礎に社会政策の位置付けを示している。さらに、第3章では、「近代経済学とマルサス」と題し、マルサス人口論から近代経済学の評価を行い、とくにライベンシュタインの研究を検討し、マルサス人口論の現代における重要性を指摘している。

さて、第4章以降は、第1～3章とやや趣を異にする。まず第4章では、「人口統計の方法」として、形式人口学の方法の解説に当てられている。この章は、多分に第5章から始まる人口現象の実証分析のための基礎知識を紹介することを目的として挿入されたものであろう。それにしても第1章から第3章まで抽象度の高い議論が展開された後で、人口論の読者が期待する各論の導入としてはやや奇異な印象を受けるのは筆者だけに限るまい。とはいえ、人口学的方法論の全体が要領良くまとめられ、人口学で良く利用される統計指標が分かりやすく解説されている。

第5章では、「日本の人口・世帯数の増加と住宅建設循環」と題し、戦後日本の人口総数の増加ならびに出生数・結婚数変動と世帯構成の関係を分析し、さらに住宅建設循環との関係を子細に分析している。この章は、実証分析家としての石教授の一面を示すもので、本章の基底には、人口変動が及ぼす社会経済的影響、すなわち人口変動を外生変数とする社会経済変化があり、第1～3章で展開された理論的検討を下敷きにしている。ただし、取り上げられた課題が極めて絞られているため、理論的に展開されたマルサス経済学のどの部分が実証分析によって明らかにされたのか、実証から理論へのフィード・バックがやや不鮮明な感じを受けた。また、第6章は、「日本の人口高齢化と生活構造」と題し、日本人口の年齢構成の変化がどのように人々の生活構造を変化させているかを統計資料から概観したものである。

第7章と第8章は、「アジアNIESの経済発展と人口要因」ならびに「中国人口の分析と将来推計」と題するもので、第7章ではアジアNIESの人口事情と経済発展の関係を、儒教文化との関係で論じ、また第8章では、中国人口の形式人口学的検討から将来の人口趨勢について論及されている。

最後の第9章は、「世界人口の前途と永久平和」と題し、人口変動の理念的整理から、マルサスの「有効人口」の概念について論じ、「人口政策の有効性」と「世界平和」の展望を論じている。

さて、おそらく本書を読まれた読者は、ある不満を感じるであろう。それは第1章から第3章が前後関係を考慮して論述されているのに、第4章以降とのつながりが良く見えてこないことに起因している。書名からは、人口に関する体系的な記述を連想させるが、むしろ単独の論文集という印象を受ける。とはいえ、個々の章は、極めて示唆に富むテーマが論じられている。そして、おそらく第4章以降は今後発表される論文によって、石人口学として体系化されるものと思われる。本書は、人口学研究についてまとまった記述がされる単著が少ないなか、有用な著書である。

(高橋重郷)